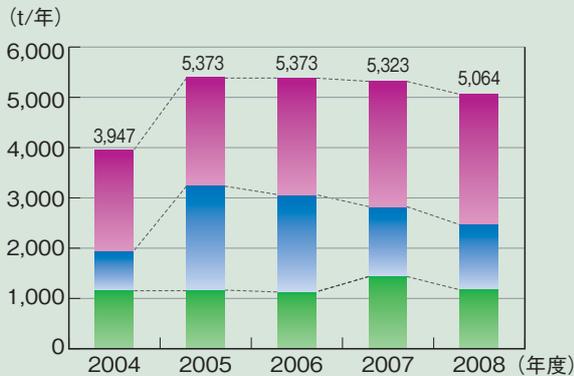
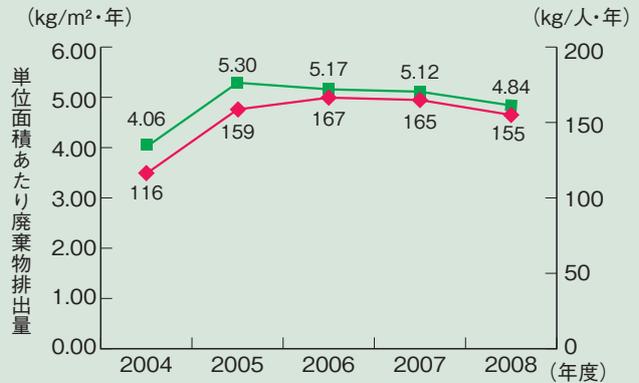


3 環境計画「5つの柱」に関する取り組み 廃棄物による環境負荷の低減



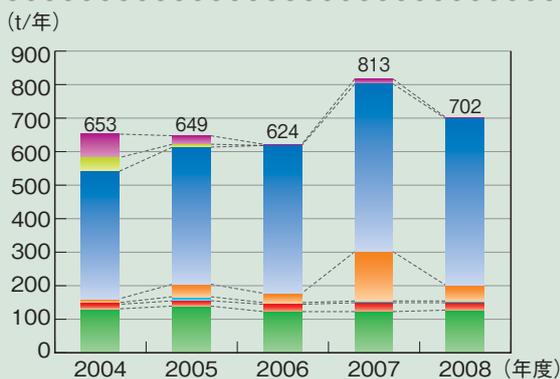
■ 普通産業廃棄物 (プラスチック屑、ガラス屑、金属屑など)
■ 事業系一般廃棄物 (厨芥類、空き缶、空き瓶、ペットボトル、大型ごみなど)
■ 紙類 (新聞紙、雑誌、段ボール、OA用紙など)

生活系廃棄物排出量



■ 単位面積あたり廃棄物排出量
◆ 一人あたり廃棄物排出量

生活系廃棄物排出量原単位



■ その他 ■ 廃石棉 ■ 感染性廃棄物
■ 廃汚泥 ■ 廃アルカリ ■ 廃酸 ■ 廃油

実験系/特別管理産業廃棄物排出量



■ 単位面積あたり廃棄物排出量
◆ 一人あたり廃棄物排出量

実験系/特別管理産業廃棄物排出量原単位

2008年度は生活系廃棄物と実験系/特別管理産業廃棄物をあわせて、約5,700tを排出しました。前年度に比べると生活系廃棄物排出量は4.9%減少、実験系/特別管理産業廃棄物排出量は13.7%減少しました。単位面積あたりの生活系廃棄物排出量は5.5%減少、実験系/特別管理産業廃棄物排出量は14.1%減少しました。

廃棄物排出量については、正確なデータ把握ができるよう継続的に整備を進めています。生活系廃棄物の内訳は、紙類や容器包装の金属類やプラスチック類が多くを占めています。2008年度は、学内店舗におけるレジ袋の使用削減に取り組み、またマイボトルシステムへの取り組みを始めているところです。実験系/特別管理産業廃棄物については、適切な処理処分を継続します。

■ 枯渇性資源由来廃棄物の削減に向けて

京都大学生協 環境委員会 水嶋周一

◎ レジ袋削減の現状と課題

京都大学では、2007年度の環境目標・実施計画の一つに「枯渇性資源由来廃棄物の発生抑制対策」を掲げ、特に「レジ袋削減対策」を実施してきました。2007年11月より京都大学生協(以下、生協とする)の購買で、2008年1月からはローソン(NLS

京都大学店以下、ローソンとする)で、「必要との申し出があった方だけにレジ袋を無料でお渡しする」方式を導入しています。

2008年度もこの方式を継続し、レジ袋の使用枚数は着実に減少しています。生協が本格的にレジ袋削減に取り組み始めた2007年9月から2008年8月の1年間と、

その前年(2006年9月～2007年8月)とを比較すると、およそ86万枚(重量では約3.0t)が削減されたことになり、削減率は78%でした。レジ袋の使用率は2008年度を通して、おおむね一桁を維持しています。また、学内で廃棄されたレジ袋も、2007年10月と2008年10月の生活系廃棄物の組

成調査(学内の数カ所で採取)の結果を比較すると、約64%の減量を達成していることがわかりました。ローソンでは、レジ袋の配布率(レジ袋配布枚数/来店客数)が実験前の63.8%から2.0% (2008年の年間平均)へと大幅に下がりました。

今後より一層の削減を実現するためには、新学期に使用率が高くなることに対処し、さらにオープンキャンパスや各種行事で来学した高校生や父兄といった学外の方にも、レジ袋をもらわないよう協力を求めるといった取り組みが重要になってきます。

◎飲料容器の削減を目指して

レジ袋の削減は「リデュース」、すなわち発生を回避するということで、廃棄物対策

のなかで最優先されるべき取り組みに相当します。次なるリデュースのターゲットとしてPETボトルに代わる飲料容器の検討を実践的に始めました。京都大学では、生協の自動販売機だけで、年間約24万本(2008年4月～2009年3月)ものPETボトルが購入され、それらが廃棄・リサイクルされています。PETボトルの使用回避には、各自がマイボトルを持ち、これを繰り返し使用するという方法が考えられます。

京都大学での全学的なマイボトルの普及とデイスペンサーによる飲料提供の導入の可能性を探るため、2009年5月から、「京都大学マイボトル・モニター実験」を実施しています。学内の学生、教職員など約530名にモニターとして参加していただき、ボト

ルを配布します。一定期間、生協の店舗でボトルを用いて飲料を購入していただき、実験期間終了後に行うアンケート調査と、それに基づく環境負荷削減効果の検討を行います。購入回数、飲料の価格やメニュー、ボトルの使用感、改善提案などの情報を得ることで、環境にやさしくかつ継続的な販売システムの構築を目指します。



マイボトルでの飲料購入の様子

■ 廃棄物管理担当者講習会

京都大学環境計画では、「廃棄物による環境負荷の低減」を挙げています。この基礎を固めるためには学内構成員の廃棄物排出に関する正しい理解が必要であるとの認識から、2008年度も各部局の廃棄物管理担当者に対して講習会を行いました。

講習会は環境安全衛生部職員が講師となり、各部局から52名の参加がありました。

この講習会では、廃棄物の処理費用を

低減する方法をいくつか提案しました。費用を低減するためには、リデュース(廃棄物の排出量自体を抑制すること)や、できるだけ分別し高品位でリサイクルにまわすことが重要となります。紙ごみを古紙回収に引き渡して再資源化したり、秘密書類をリサイクルルートにまわすことで、処分費用が低減できる可能性があることを示しました。また家電やパソコンについては、適切な処

分を行う必要性などを解説しました。

各部局では、分別の取り組みや回収スペースの整備などの取り組みが進められています。しかし現在は廃棄物の分別方法やその処分方法が部局ごとに異なっています。今後、大学が廃棄物による環境負荷を低減していくためには、具体的な削減目標を定めることが課題であり、そのための方法を検討していくことが必要となっています。

■ 実験廃棄物の取り扱い手順の改善

部局から排出される不用薬品等の外部委託処理手続きについて、手順書を改訂しま

した。この改善により部局内委員会において処理業者や内容などを審議されることと

なり、不用薬品等の搬出が迅速にできるようになりました。

■ ペーパーレス会議の推進

京都大学教職員グループウェアを利用している構成員は、ペーパーレス会議システムを利用することができるようになりました。このシステムは、一部教職員の打ち合わせや会議で利用されており、膨大な資料をコピー用紙に印刷することなく、参加者がパソコンの画面上で同じ資料を共有しながら会議ができることが特徴です。

2008年度には、京都大学でコピー用紙

が約9,500万枚使用されました。コピー用紙に印刷された資料を使用せずパソコンの画面を共有して会議を行うことは、コピー用紙の使用削減だけでなく、会議終了後には不要になり廃棄されていたコピー用紙が削減できるというメリットもあります。今後は、遠隔地の教職員を委員に含む会議などに利用されることが期待されています。

2009年2月には各部局の電子事務局推

進リーダーを対象に、ペーパーレス会議システム講習会が電子事務局推進室の主催で開かれ、操作説明などが行われました。自分の操作が他の参加者の画面に共有されていることに初めは戸惑っていた参加者もすぐに操作に慣れ、部局の構成員にも紹介し活用したいとの感想もありました。